

児童虐待発生のリスク因子に関する一考察 — 児童虐待に対する母親の意識調査結果を通して

A Study of the Factor of Risk in Child Abuse — Based on the Findings of the Survey on Mother's Conceptional Attitude toward Child Abuse

伊藤わらび
Warabi ITO

1. 問題の所在

子どもたちの心身と人格の形成に深刻な影響を与える児童虐待は年々増加の一途をたどっている。2007年度に全国の児童相談所が対応した児童虐待件数は4万618件と4万件を超えた。この数字は、1990年度1,101件の36.9倍、1999年度11,631件の3.5倍である。(厚生労働省雇用均等・児童家庭局調べ) これと一部重複の可能性があるが市区町村が対応したものは、2006年度約4万8千件で前年度より2割増加している。虐待を受けた子どもの年齢構成は、2006年度約37,323人のうち、0～3歳未満17.3%、3歳～学齢前児童25.0%で乳幼児が42.3%を占め、小学生38.8%、中学生13.9%、高校生・その他5.0%となっている。虐待の内容別相談件数は、身体的虐待が41.2%で最も多く、次いでネグレクト(養育放棄)38.5%、心理的虐待17.2%、性的虐待3.1%である。主たる虐待者は、実母が62.8%で最も多く、次いで実父22.0%、実父以外の父6.5%である。児童虐待は家庭の密室化した中で行われるために、表に出た数字は氷山の一角であるといわれる。ある自治体が2007年度に受けた虐待事例の原因を分析したところ、ひとり親や未婚、経済不安、孤立といった養育環境の問題が7割を占め、情緒不安定や育児不安など養育者自身の状況が6割、育てにくいなど子どもの状況が4割であったと報告されている。

わが国では、1947年に制定された「児童福祉法」において児童虐待の禁止が規定されているが、その条項をさらに補強するために2000年5月24日児童虐待防止法が制定された。児童虐待の発生予防に向けて保健師や子育て経験者等による育児支援家庭訪問事業の他に、地域において保健、医療、福祉、教育、警察、司法等の機関や団体の連携の元に児童虐待死の撲滅を目指して要保護児童対策地域協議会の設置が促進されている。一方、今日児童養護施設入所児童の

70%以上が家庭において児童虐待を受けていたという深刻な事態に鑑み、心理療法担当職員や被虐待児個別対応職員、ファミリーソーシャルワーカーの配置などにより虐待を受けた子ども達の心身のケアの充実に向けて取り組まれている。虐待を含めた児童相談は2005年度より従来の児童相談所と共に市区町村の業務となった。2007年5月に改正（2008年4月施行）された児童虐待防止法は児童の安全確認等のための立入調査等の強化や保護者に対する措置の明確化等が規定された。近年、市区町村の取り組みの他に、地域におけるNPOを始め各種団体や、グループによる子どもへの暴力防止を目指す活動が全国的に展開されている。親同士が支えあう自助グループも広がりを見せており、一方、児童虐待発見の最前線である病院内に虐待対策委員会の設置もみられるようになった。

児童期に被虐待体験を持つと成人後も様々な身体的、精神的不調に悩まされると共に時にはわが子に対して虐待を繰り返すという世代間連鎖がみられることも明らかにされている。また、十代や成人後の犯罪の発生率が高いという米国の調査結果も報告されている。児童虐待を予防するためには、早期発見、早期治療が何よりも重要である。主な虐待者が実母が多くを占めていることから、子育て中の母親たちをわが子を虐待へ追い込む心理的、社会的及び家族環境などの要因を把握し、それを除去する事が児童虐待の発生を防止する上で重要といえる。深谷らはその著書の中で「児童虐待の件数増加を強調し、児相や施設職員の増員や費用加算を論議する風潮が高まっているが、虐待の実質的件数、虐待の程度、予後の軽重、ハイリスク親への予防支援など虐待のエビデンスに基づいた研究はわが国ではきわめて少ない。」と指摘している。（注1）

2. 研究目的

児童虐待の発生には多くの要因が関わっていると考えられている。児童虐待発生の諸条件としての虐待のリスク因子は、①虐待しやすい親 ②家庭のストレス ③孤立 ④子どもの特徴、などに分類され、これらの条件が重なった時に虐待が発生しやすいといわれる。（注2）

本研究では、乳幼児をもつ母親を対象に2006年に実施した調査においてわが子を虐待する母親の気持ちが「理解できる」と回答した母親について、「育児にストレスを抱える人」、あるいは「児童虐待発生のリスク因子をもつ人」、状況によっては「児童虐待予備軍」といえるかも知れないという仮説を設定した。そして、母親の気持ちが「理解できない」と回答した母親たちとの育児の実態や意識、生活状況等の多様な要素の有意差を通して児童虐待を発生すると考えられるリスク因子を把握・分析する。また1996年に実施した同様の調査結果（注3）と2006年調査結果を比較し、児童虐待に対する母親たちの10年間の意識の類似、もしくは変容について把握し児童虐待発生のリスク因子について明らかにすることを試みる。また、リスク因子を有する母親の特性を通して、児童虐待の発生を予防する子ども家庭支援施策のあり方について考察する。

3. 研究方法

2006年（702名）に、1996年（597名）、1986年（526名）とほぼ同様の72の設問からなる「乳幼児を持つ母親の育児の実態と育児意識」調査を実施した。（表1、2）（注4）それら三つの

調査のうち、1996年と2006年調査において、当時社会問題化してきた児童虐待についての設問を設け、児童虐待をする「母親の気持ちが理解できる」、又は「母親の気持ちが理解できない」について回答して頂いた。(表3)「理解できる」との回答は1996年35.5%、2006年27.5%で8ポイント減少していた。一方、母親の気持ちが「理解できない」は、1996年43.0%、2006年44.2%で大きな差異はみられなかった。「その他」の回答が両調査共に20%以上を占めていることから、子育て中の母親にとって児童虐待に対する意識が複雑であることがうかがえる。

乳幼児を養育中の母親たちの基本属性や育児の意識と実態、育児支援施策の利用状況と要望、保育施設、就労についての意識等多岐にわたる要素をクロス集計し、その結果を通して育児ストレスや、児童虐待発生のリスク因子を明らかにする。

本稿で用いている表は、特に明記したものを除き2006年の調査結果である。

表1 有無職別居住地地域別母親の数

(上段=実数 下段=%)

	全体	就労の有無		
		有職	無職	不明
合計	702 100.0	317 45.2	382 54.4	3 0.4
東京都	277 100.0	77 27.8	199 71.8	1 0.4
神奈川県	7 100.0	4 57.1	3 42.9	0 0.0
埼玉県	380 100.0	224 58.9	155 40.8	1 0.3
千葉県	17 100.0	8 47.1	9 52.9	0 0.0
その他	16 100.0	2 12.5	14 87.5	0 0.0
不明	5 100.0	2 40.0	2 40.0	1 20.0

表2 居住地地域別年齢別乳幼児数

(上段=実数 下段=%)

	全体(子ども の人数)	第1~6子:年齢								小学生以上	不明
		0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳			
合計	1186 100.0	118 9.9	162 13.7	149 12.6	161 13.6	136 11.5	155 13.1	22 1.9	283 23.9	0 0.0	
東京都	414 100.0	56 13.5	93 22.5	74 17.9	47 11.4	33 8.0	39 9.4	3 0.7	69 16.7	0 0.0	
神奈川県	8 100.0	2 25.0	0 0.0	1 12.5	3 37.5	1 12.5	0 0.0	0 0.0	1 12.5	0 0.0	
埼玉県	691 100.0	51 7.4	61 8.8	62 9.0	104 15.1	96 13.9	106 15.3	18 2.6	193 27.9	0 0.0	
千葉県	36 100.0	6 16.7	1 2.8	7 19.4	4 11.1	4 11.1	4 11.1	0 0.0	10 27.8	0 0.0	
その他	30 100.0	2 6.7	5 16.7	4 13.3	3 10.0	2 6.7	5 16.7	1 3.3	8 26.7	0 0.0	
不明	7 100.0	1 14.3	2 28.6	1 14.3	0 0.0	0 0.0	1 14.3	0 0.0	2 28.6	0 0.0	

表3 児童虐待について（母親の就労の有無別）

(上段=実数 下段=%)

		全体	児童虐待に対する考え			
			母親の気持ちが理解できる	母親の気持ちが理解できない	その他	不明
1996年	合計	597 100.0	212 35.5	257 43	121 20.3	7 1.2
	有職	288 100.0	109 37.8	121 42.0	52 18.1	6 2.1
	無職	309 100.0	103 3.3	136 44.0	69 22.3	1 0.3
	不明	-	-	-	-	-
2006年	合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
	有職	317 100.0	86 27.1	144 45.4	83 26.2	4 1.3
	無職	382 100.0	106 27.7	165 43.2	100 26.2	11 2.9
	不明	3 100.0	1 33.3	1 33.3	1 33.3	0 0.0

4. 調査概要

(1) 調査対象

東京都、及び近県に居住している乳幼児を養育中の有職・無職の母親

(2) 調査時期

1996年 7月～8月

2006年 6月～9月

(3) 調査方法

多肢選択法による質問紙法を用いた。保育所、幼稚園、子育て支援センター及び乳幼児をもつ地域の母親達に調査票を配布すると共に一部を郵送した。

(4) 回収率

1996年 調査票配布数 650 有効回収数 597 回収率 91.8%

2006年 調査票配布数 750 有効回収数 702 回収率 93.6%

(5) 調査項目について

1) 基本属性等 2) 乳幼児の育児の実態 3) 母親の育児意識

4) 育児支援施策の利用状況 5) 保育施設について 6) 母親の就労について

5. 結果と考察

(1) 母親の基本属性別児童虐待に対する意識

①母親の年齢階層別

「わが子への虐待について理解できるか」との設問の回答を母親の年齢階層別にみると、

20歳代前半の24歳までが「母親の気持ちが理解できる」が33.3%で最も多く、次いで30～34歳32.8%である。最も少ない年代は、40歳以上15.9%、25～29歳20.2%である。「母親の気持ちが理解できない」との回答は、25～29歳が55.3%で最も多く、次いで24歳以下54.5%である。30歳代以上は、40%前後と少ないが、特に35歳以上は「その他」の回答が多い。

前回1996年調査結果と比較すると、「理解できる」は35.5%であったものが、2006年調査では、27.5%に減少している。「理解できない」は、ほぼ同じであるが、「その他」の回答が5.9ポイント増加している。「理解できない」の年代別の回答は、24歳以下と30～34歳を除いて他の年代は大きく減少している。特に40歳以上では、24.1ポイントと大きく減少し、半分以下となっている。(表4)

表4 児童虐待について (年齢別)

(上段=実数 下段=%)

		全体	児童虐待に対する考え			
			母親の気持ちが理解できる	母親の気持ちが理解できない	その他	不明
1996年	合計	597 100.0	212 35.5	257 43.0	121 20.3	28 1.2
	24歳以下	29 100.0	9 31.0	18 62.1	2 6.9	0 0.0
	25歳～29歳	130 100.0	46 35.4	66 50.8	18 13.8	0 0.0
	30歳～34歳	226 100.0	78 34.5	93 41.2	52 23.0	3 1.3
	35歳～39歳	140 100.0	48 34.3	47 33.6	43 30.7	2 1.4
	40歳以上	45 100.0	18 40.0	23 51.1	4 8.9	0 0.0
	不明	-	-	-	-	-
	合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
2006年	24歳以下	33 100.0	11 33.3	18 54.5	3 9.1	1 3.0
	25歳～29歳	94 100.0	19 20.2	52 55.3	22 23.4	1 1.1
	30歳～34歳	247 100.0	81 32.8	104 42.1	56 22.7	6 2.4
	35歳～39歳	196 100.0	53 27.0	78 39.8	62 31.6	3 1.5
	40歳以上	69 100.0	11 15.9	29 42.0	27 39.1	2 2.9
	不明	63 100.0	18 28.6	29 46.0	14 22.2	2 3.2

②母親の最終学歴別

大学院修了者が「理解できる」との回答が最も多く、36.4%、次いで中学校と大学卒で30.0%である。「母親の気持ちが理解できない」は中学校卒で50.0%であり、学歴が高くなる程少なくなっている。前回調査では、「理解できる」が大学卒が45.6%と最も多く、中学校卒が27.3%と最も少なかった。2006年調査では、大学卒が、15.6ポイント減少していることが目立つ。(表5)

表5 児童虐待について（母親の最終学歴別）

	(上段=実数 下段=%)				
	全体	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ちが理解できる	母親の気持ちが理解できない	その他	不明
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
中学	10 100.0	3 30.0	5 50.0	2 20.0	0 0.0
高校	188 100.0	46 24.5	93 49.5	48 25.5	1 0.5
短大・専門学校	270 100.0	69 25.6	125 46.3	65 24.1	11 4.1
大学	213 100.0	64 30.0	83 39.0	64 30.0	2 0.9
大学院	11 100.0	4 36.4	3 27.3	4 36.4	0 0.0
その他	5 100.0	5 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0
不明	4 100.0	1 25.0	1 25.0	1 25.0	1 25.0

③母親自身の兄弟姉妹の人数別

2人兄弟姉妹で育った母親が、「理解できる」が31.0%と最も多く、次いで5人以上が23.8%である。4人兄弟姉妹が、14.3%で最も少なく、次いで一人っ子が18.2%である。

前回調査では、「理解できる」との回答は、1人っ子が最も多く、46.5%、次いで4人以上が42.0%であったので今回調査結果では大きく減少している。2人、3人兄弟姉妹の回答には2つの調査結果に大きな差異はみられない。(表6)

④母親の有職・無職別

「母親の気持ちが理解できる」は、有職27.1%、無職27.7%と、母親の有・無職別の回答結果に大きな差異はみられない。

前回調査では、「理解できる」との回答は、有職37.8%、無職33.3%と、4.5ポイントの差異がみられたが、2006年調査では、双方共大きく減少がみられる一方、回答が逆転している。(表3) 有職者の就労形態別にみると自営業主と家族従事者が「理解できる」が36.0%である。職種別にみると「事務系」29.8%と「サービス業」29.1%が「販売」「専門職」より多い。

表6 児童虐待について（母親の兄弟姉妹の人数別）

(上段=実数 下段=%)

		全体	児童虐待に対する考え			
			母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他	不明
2006年	合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
	一人っ子	44 100.0	8 18.2	22 50.0	13 29.5	1 2.3
	2人	374 100.0	116 31.0	156 41.7	94 25.1	8 2.1
	3人	215 100.0	51 23.7	100 46.5	61 28.4	3 1.4
	4人	21 100.0	3 14.3	8 38.1	8 38.1	2 9.5
	5人以上	21 100.0	5 23.8	13 61.9	3 14.3	0 0.0
	不明	27 100.0	10 37.0	11 40.7	5 18.5	1 3.7

(2) 生活状況別児童虐待に対する意識

①居住地域別

その他と不明の居住地を除くと、「母親の気持ち理解できる」は東京都在住が30.7%で最も多く、次いで埼玉県が24.7%となっている。前回調査では、東京都（296人）と埼玉県（129人）が最も多く38.2%であったので、特に埼玉県の減少が目立つ。（表7）

表7 児童虐待について（居住地別）

(上段=実数 下段=%)

	全体	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他	不明
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
東京都	277 100.0	85 30.7	117 42.2	67 24.2	8 2.9
神奈川県	7 100.0	1 14.3	6 85.7	0 0.0	0 0.0
埼玉県	380 100.0	94 24.7	170 44.7	109 28.7	7 1.8
千葉県	17 100.0	4 23.5	10 58.8	3 17.6	0 0.0
その他	16 100.0	7 43.8	6 37.5	3 18.8	0 0.0
不明	5 100.0	2 40.0	1 20.0	2 40.0	0 0.0

②同居の家族数別

同居の家族は、2人家族が「理解できる」が最も多く、50.0%、次いで4人が30.1%、5人が29.4%である。「理解できない」は6人家族が62.2%と最も多く、次いで、7人以上、となっている。家族の人数が多い程「理解できる」が少なく「理解できない」が多い。前回調査では、「理解できる」は2人家族が23.5%でもっとも少なく、家族数が増加する程多くなり6人以上の家族は44.3%であったところから2006年調査ではほぼ逆転しているのが分かる。

③子どもの人数別

子どもの人数は1人～3人が98.1%を占めているが、3人の子どもを有する母親が「母親の気持ち理解できる」が37.7%と最も多く、2人、1人と次第に減少している。子どもの数が3人と1人の差異は13.4ポイントである。「理解できない」は、逆転している。前回調査結果も「理解できる」は、3人の子どもを持つ母親が「母親の気持ち理解できる」が37.9%で最も多いが、1人との差異は7.8%と少ない。一方、4人の子どもをもつ母親の回答は、2006年調査は「理解できる」は10.0%であるのに対して、1996年調査は、53.8%と最も多く、両調査結果が逆転している。4人以上の実数は少ないので分析は難しいが、その家庭の多様な要因が影響していると考えられる。(表8)

表8 児童虐待について（子供の人数別）

	(上段=実数 下段=%)				
	全体	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ち理解できる	母親の気持ち理解できない	その他	不明
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
1人	325 100.0	79 24.3	151 46.5	84 25.8	11 3.4
2人	287 100.0	84 29.3	126 43.9	74 25.8	3 1.0
3人	77 100.0	29 37.7	27 35.1	21 27.3	0 0.0
4人	10 100.0	1 10.0	5 50.0	4 40.0	0 0.0
5人	2 100	0 0.0	1 50.0	1 50.0	0 0.0
6人	1 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 100.0
不明	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0

④子どもの年齢別

子どもの年齢別の「母親の気持ちが理解できる」の回答結果は、0歳児が23.2%で最も少なく、年齢が上がるごとに次第に増加し、4歳児をもつ母親の回答が33.7%で最も多く、0歳児と比べると10.5ポイント多い。前回調査では、「理解できる」の回答は1歳児が41.1%で最も多く、次いで2歳児、5歳児であったが2006年調査では、子どものいずれの年齢も多い。二つの調査結果に差異が見られる。(表9)

⑤子どもの男女別

男の子のみを持つ母親に、「理解できる」の回答が多く、32.4%であり、女の子のみを持つ母親の回答に比べ約10ポイント多い。前回調査では、集計の方法が異なるので、妥当な比較にならないが、男・女児を持つそれぞれの回答に大きな差異はみられなかった。(表10)

⑥子どもの通園等の状況別

「理解できる」との回答は、子どもが自宅にいる母親が最も多く、29.9%、次いで保育施設29.2%で両者に大きな差異はない。子どものうち、中学生がいる場合は、「理解できる」は15.2%と最も少なく、「母親の気持ちが理解できない」が51.5%で最も多い。この回答結果は、母親に子育ての経験があることと、また、上の子どもが家事・育児を手伝ってくれていることも考えられる。前回調査では、「理解できる」の回答は、保育施設に通

表9 児童虐待について(子どもの年齢別)

(上段=実数 下段=%)

	全体(子供の人数)	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ちが理解できる	母親の気持ちが理解できない	その他	不明
合計	1186 100.0	338 28.5	509 42.9	316 26.6	23 1.9
0歳	118 100.0	35 23.2	59 60.7	23 14.3	1 1.8
1歳	162 100.0	48 24.7	70 47.4	40 24.7	4 3.1
2歳	149 100.0	44 27.2	55 37.0	47 33.3	3 2.5
3歳	161 100.0	47 28.6	74 46.8	38 22.1	2 2.6
4歳	136 100.0	36 33.7	66 41.0	33 24.1	1 1.2
5歳	155 100.0	48 27.6	57 42.5	45 27.6	5 2.3
6歳	19 100.0	5 27.3	12 45.5	5 27.3	0 0.0
小学生以上	283 100.0	75 27.1	116 41.9	85 29.0	7 1.9
不明	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0

表10 児童虐待について(男女別)

(上段=実数 下段=%)

	全体	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他	不明
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
男のみ	238 100.0	77 32.4	98 41.2	55 23.1	8 3.4
女のみ	248 100.0	56 22.6	115 46.4	73 29.4	4 1.6
男と女両方	215 100.0	59 27.4	97 45.1	56 26.0	3 1.4
不明	1 100.0	1 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0

表11 児童虐待について(通園等別)

(上段=実数 下段=%)

	全体(子 供の人数)	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他	不明
合計	1186 100.0	338 28.5	509 42.9	316 26.6	23 1.9
自宅	345 100.0	103 29.9	156 45.2	77 22.3	9 2.6
保育施設(幼稚園 等含む)	551 100.0	161 29.2	231 41.9	152 27.6	7 1.3
小学校	229 100.0	64 27.9	91 39.7	70 30.6	4 1.7
中学校	33 100.0	5 15.2	17 51.5	9 27.3	2 6.1
その他	27 100.0	5 18.5	13 48.1	8 29.6	1 3.7
不明	1 100.0	0 0.0	1 100.0	0 0.0	0 0.0

ている母親が39.2%と最も多く、自宅にいる子どもの母親の28.5%より約10ポイント多かった。両年の調査結果に差異がみられるが、10年前に比べて、今日、地域における子育て支援施策が充実してきたことも背景の理由として考えられる。(表11)

⑦父親の有無別

2006年調査では、母子世帯が32世帯4.6%を占めている。「理解できる」の回答が母子世帯は37.5%で、父母のいる家庭と比べると10.5ポイント多い。前回調査では、母子世帯は、12世帯2.0%であったが、回答結果が逆転している。「理解できる」の回答は、母子世帯は16.7%であるのに対して、父母のいる家庭は35.9%と2倍以上であった。2006年調査時の方が、10年前に比べて母子世帯が生活状況等に困難がみられるのかもしれない。(表12)

表12 児童虐待について（父親の有無別）

（上段＝実数 下段＝％）

		全体	児童虐待に対する考え			
			母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他	不明
1 9 9 6 年	合計	597 100.0	212 35.5	257 43.0	121 20.3	28 1.2
	あり	585 100.0	210 35.9	249 42.6	119 20.3	7 1.2
	なし	12 100.0	2 16.7	8 66.7	2 16.7	0 0.0
	不明	-	-	-	-	-
2 0 0 6 年	合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
	あり	670 100.0	181 27.0	294 43.9	180 26.9	15 2.2
	なし	32 100.0	12 37.5	16 50.0	4 12.5	0 0.0
	不明	0 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0

⑧住宅状況別

わが国の住宅事情の悪さが、子どもの発達や子育て困難、少子化の問題に影響を与えていると指摘されるが、本調査でもやや差異がみられた。「母親の気持ち理解できる」との回答は、社宅が20.0%で最も少なく、次いで一戸建持家が25.5%である。次いで、一戸建借家が35.5%と最も多く、次いで民間アパートが35.2%である。前回調査では、「理解できる」は、一戸建借家が27.3%と最も少なく、次いで集合住宅・賃貸が30.7%である。「理解できる」の回答で多いのは、社宅が42.4%で最も多く、次いで、集合住宅・分譲41.2%である。二つの調査を比較すると、社宅と借家の順位が逆転している。前回調査では「理解できる」が集合住宅・分譲41.2%、持家は37.2%と多かったが、2006年調査ではそれぞれ29.8%、25.5%と減少している。住宅取得が10年前の住宅ローンの利率に比べ、その後低利となり、家計への圧迫が軽減されたことも考えられる。（表13）

⑨生活水準別

生活水準に対する意識は、上が1.6%、中の上16.1%、中の中47.4%、中の下19.4%、下3.7%、分からない8.7%である。児童虐待に対して「母親の気持ち理解できる」との回答は、生活水準が下が38.5%で最も多く、次いで中の下が34.6%である。中水準の中の回答者が23.7%で最も少ない。生活困窮意識と「児童虐待」の考え方、あるいは児童虐待リスク因子に相関が見られる。前回調査では、中の中が最も多く、52.4%であり、2006年調査では、中の下、下、分からないが増加している。1996年調査でも、「理解できる」は生活水準が下と回答した母親が44.4%で最も多く、中の下41.6%と中の上、中より多い。上との回答者は5名いたが、そのうち3名（60.0%）が理解できると回答している。回答数が少なく、十分な比較ができないが経済状況が良好であっても「児童虐待」リスク、育児ストレスがあることがうかがえる。（表14）

表13 児童虐待について（居住の状況別）

(上段=実数 下段=%)

	全体	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ちが理解できる	母親の気持ちが理解できない	その他	不明
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
集合住宅:分譲	131 100.0	39 29.8	53 40.5	34 26.0	5 3.8
集合住宅:賃貸	146 100.0	39 26.7	69 47.3	34 23.3	4 2.7
一戸建て:持ち家	290 100.0	74 25.5	130 44.8	82 28.3	4 1.4
一戸建て:借家	31 100.0	11 35.5	15 48.4	5 16.1	0 0.0
民間アパート	54 100.0	19 35.2	22 40.7	12 22.2	1 1.9
間貸し	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0
社宅	45 100.0	9 20.0	20 44.4	15 33.3	1 2.2
その他	1 100.0	0 0.0	1 100.0	0 0.0	0 0.0
不明	4 100.0	2 50.0	0 0.0	2 50.0	0 0.0

(3) 乳幼児の育児の実態別児童虐待に対する意識

①出産状況別

「理解できる」は出産時難産だった母親がもっとも多く31.7%で、安産だった人より、3.4ポイント多い。前回の調査では、同様に、難産だった人が40.3%で最も多く、次いで安産が36.9%であり、3.4ポイント多い。大きな差異はみられないが、二つの調査結果において、難産と育児ストレスや児童虐待発生のリスク因子の相関関係において同様の傾向がみられる。(表15)

②乳児期の栄養別

「理解できる」が最も多いのが人工栄養34.1%、次いで母乳29.9%である。前回の調査では、母乳が43.0%と最も多く次いで混合栄養35.6%、人工栄養28.2%であり、今回の調査と順位が異なっている。理由はよく分からないが、あえていえば、2006年では人工栄養を購入するに当たり経済的な問題が関係しているのだろうか。(表16)

③授乳の方法別

「児童虐待する母親の気持ちが理解できる」は、泣いたら授乳する人が31.1%で多く、規則正しく授乳する母親20.5%より約10ポイント多い。前回の調査でも、泣いたら授乳する人の方が36.4%で多かったが、規則正しく授乳する人に比べて1.6ポイントのみ多かっ

表 14 児童虐待について（生活水準別）

(上段=実数 下段=%)

	全体	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他	不明
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
上	11 100.0	3 27.3	4 36.4	3 27.3	1 9.1
中の上	113 100.0	31 27.4	52 46.0	28 24.8	2 1.8
中の中	333 100.0	79 23.7	149 44.7	97 29.1	8 2.4
中の下	136 100.0	47 34.6	57 41.9	30 22.1	2 1.5
下	26 100.0	10 38.5	11 42.3	5 19.2	0 0.0
わからない	61 100.0	17 27.9	27 44.3	17 27.9	0 0.0
不明	22 100.0	6 27.3	10 45.5	4 18.2	2 9.1

表15 児童虐待について（出産状況別）

(上段=実数 下段=%)

	全体(子 供の人数)	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他	不明
合計	1186 100.0	338 28.5	509 42.9	316 26.6	23 1.9
安産	999 100.0	283 28.3	434 43.4	264 26.4	18 1.8
難産	123 100.0	39 31.7	49 39.8	31 25.2	4 3.3
早産	39 100.0	10 25.6	11 28.2	18 46.2	0 0.0
不明	25 100.0	6 24.0	15 60.0	3 12.0	1 4.0

た。1996年調査では、両方の授乳方法をとる人は、ほぼ同数であったが、2006年調査では、泣いたら授乳するが増加し64.4%を占め、規則正しく授乳する人の2倍以上となっている。乳児の要求を尊重した授乳方法の方が、母親に対してストレスを与えることになるのだろうか。規則正しく授乳した方が、母親の生活リズムが出来上がり育児がスムーズにいくのだろうか。一考に値するといえる。(表17) (注5)

表16 児童虐待について（乳児期の栄養別）

(上段=実数 下段=%)

	全体(子供の人数)	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ちが理解できる	母親の気持ちが理解できない	その他	不明
合計	1186 100.0	338 28.5	509 42.9	316 26.6	23 1.9
母乳	531 100.0	159 29.9	221 41.6	142 26.7	9 1.7
人口	126 100.0	43 34.1	57 45.2	23 18.3	3 2.4
混合	508 100.0	130 25.6	220 43.3	148 29.1	10 2.0
不明	21 100.0	6 28.6	11 52.4	3 14.3	1 4.8

表17 児童虐待について（乳児期の授乳別）

(上段=実数 下段=%)

		全体	児童虐待に対する考え			
			母親の気持ちが理解できる	母親の気持ちが理解できない	その他	不明
1996年	合計	597 100.0	212 35.5	257 43.0	121 20.3	28 1.2
	規則正しく授乳	273 100.0	95 34.8	136 49.8	37 13.6	5 1.8
	ないたら授乳	291 100.0	106 36.4	107 36.8	76 26.1	2 0.7
	不明	-	-	-	-	-
2006年	合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
	規則正しく授乳	219 100.0	45 20.5	111 50.7	56 25.6	7 3.2
	ないたら授乳	452 100.0	141 31.2	189 41.8	117 25.9	5 1.1
	不明	31 100.0	7 22.6	10 32.3	11 35.5	3 9.7

④現在育児できがかりなことの有無別

育児で気がかりなことがある人は、「理解できる」が29.2%で、「気がかりなことがない」人の28.9%より0.3ポイント多いが、大きな差異はみられない。「理解できない」は気がかりなことの無い人が46.5%を占め、「ある」人より4ポイント多い。(表18) 気がかりなことの内容別にみると、「社会性」37.5%、「情緒的な問題」35.6%、「健康・発育問題」33.3%が「理解できる」が上位となっている。前回調査では、「理解できる」は気がかりなことの有無がそれぞれ38.3%、38.6%であり、大きな差異はみられない。「理解できない」は気がかりなことの無い母親は42.3%であり、「気がかりなことがある」母親に比べて5.7ポイント多い。両調査結果に同様の傾向がみられる。(表19)

表18 児童虐待について（子どものことで気がかりなこと有無別）

（上段＝実数 下段＝％）

	全体	理解できる	理解できない	その他	不明
全体	903 100.0	263 29.1	393 43.5	231 25.6	16 1.8
あり	675 74.8	197 29.2	287 42.5	179 26.5	12 1.8
なし	228 25.2	66 28.9	106 46.5	52 22.8	4 1.8

表19 児童虐待について（子どものことで気がかりなこと別）

（上段＝実数 下段＝％）

	全体(子供の人数)	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ちが理解できる	母親の気持ちが理解できない	その他	不明
合計	903 100.0	263 29.1	393 43.5	231 25.6	16 1.8
食事	304 100.0	90 29.6	126 41.4	82 27.0	6 2.0
排泄	144 100.0	43 29.9	54 37.5	43 29.9	4 2.8
睡眠	151 100.0	49 32.5	55 36.4	46 30.5	1 0.7
健康・発育問題	81 100.0	27 33.3	25 30.9	28 34.6	1 1.2
言葉	60 100.0	16 26.7	26 43.3	16 26.7	2 3.3
社会性	56 100.0	21 37.5	18 32.1	16 28.6	1 1.8
情緒的な問題	73 100.0	26 35.6	21 28.8	25 34.2	1 1.4
生活習慣の自立	34 100.0	8 23.5	17 50.0	9 26.5	0 0.0
指しゃぶり等の癖	103 100.0	28 27.2	44 42.7	30 29.1	1 1.0
その他	55 100.0	11 20.0	17 30.9	26 47.3	1 1.8
特になし	228 100.0	66 28.9	106 46.5	52 22.8	4 1.8
不明	95 100.0	23 24.2	47 49.5	23 24.2	2 2.1

⑤父親の育児の参加の有無別

「母親の気持ちが理解できる」は、父親の育児参加がない人では、29.9%で、参加がある人より0.8ポイント多い。「理解できない」では、父親の参加有43.8%に対して、参加なしの方が37.3%と6.5ポイント多い。父親の育児参加の内容別にみると、園の送迎や食事

の手伝いをしている場合は「理解できる」が少ない。大きな差異は見られないが入浴や散歩をしている場合「理解できない」がやや多い。前回調査では、「母親の気持ちが理解できる」は父親の育児参加ありが37.7%で、ない場合45.5%に比べて7.8ポイント少なかった。いずれの調査においても、父親の育児参加の有無が母親の児童虐待リスク、あるいは育児ストレス感に影響を与えていることがうかがえる。(表20)

表20 児童虐待について（父親の育児参加別）

(上段=実数 下段=%)

	全体(子供の人数)	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ちが理解できる	母親の気持ちが理解できない	その他	不明
合計	903 100.0	263 29.1	393 43.5	231 25.6	16 1.8
入浴	583 100.0	164 28.1	262 44.9	151 25.9	6 1.0
食事	298 100.0	77 25.8	125 41.9	92 30.9	4 1.3
おむつ・排泄	356 100.0	107 30.1	152 42.7	91 25.6	6 1.7
散歩	345 100.0	93 27.0	152 44.1	93 27.0	7 2.0
遊び相手	653 100.0	195 29.9	276 42.3	169 25.9	13 2.0
抱っこ	456 100.0	136 29.8	185 40.6	128 28.1	7 1.5
園の送り迎え	136 100.0	35 25.7	58 42.6	41 30.1	2 1.5
ほとんどやらない	67 100.0	20 29.9	25 37.3	21 31.3	1 1.5
その他	35 100.0	10 28.6	8 22.9	16 45.7	1 2.9
不明	58 100.0	17 29.3	27 46.6	12 20.7	2 3.4

⑥育児情報の入手先別

「母親の気持ちが理解できる」を育児情報の入手先別にみると義母から情報を得ている人は21.6%で最も少なく、「理解できない」が59.5%で最も多い。義母からの入手は5.3%と少ないが、恐らく両者の人間関係が良好であることも含め常時育児についてコミュニケーションをとれる状態にあると推察できる。「理解できない」では、実家の母や姉妹から育児情報を入手している母親が多く、近所の人や専門家の場合は少ない。「理解できる」は、自分で考えるしかない人が、少数ではあるが、33.3%と最も多い。前回調査では、「理解できる」は義母が情報の入手先となっている場合23.9%で最も少なく、次いで姉妹、実家の母の順となっていた。自分で考えるしかない人は48.6%で最も多く、次いで専門家が41.7%であった。2006年調査では、すべての入手先において「理解できる」が減少し、「理解できない」は一部を除いて、増加している。(表21)

表21 児童虐待について（育児情報の入手先別）

（上段＝実数 下段＝％）

		全体	母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他	不明
全体		702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
実家の母	はい	243 100.0	67 27.6	122 50.2	49 20.2	5 2.1
	いいえ	443 100.0	122 27.5	182 41.1	132 29.8	7 1.6
義母	はい	37 100.0	8 21.6	22 59.5	7 18.9	0 0.0
	いいえ	649 100.0	181 27.9	282 43.5	174 26.8	12 1.8
姉妹	はい	89 100.0	22 24.7	44 49.4	20 22.5	3 3.4
	いいえ	597 100.0	167 28.0	260 43.6	161 27.0	9 1.5
近所の人	はい	208 100.0	59 28.4	81 38.9	64 30.8	4 1.9
	いいえ	478 100.0	130 27.2	223 46.7	117 24.5	8 1.7
保育所	はい	158 100.0	49 31.0	66 41.8	41 25.9	2 1.3
	いいえ	528 100.0	140 26.5	238 45.1	140 26.5	10 1.9
幼稚園	はい	71 100.0	20 28.2	28 39.4	22 31.0	1 1.4
	いいえ	615 100.0	169 27.5	276 44.9	159 25.9	11 1.8
専門家	はい	41 100.0	11 26.8	16 39.0	13 31.7	1 2.4
	いいえ	645 100.0	178 27.6	288 44.7	168 26.0	11 1.7
育児書・雑誌など	はい	218 100.0	59 27.1	94 43.1	63 28.9	2 0.9
	いいえ	468 100.0	130 27.8	210 44.9	118 25.2	10 2.1
自分で考えるしかない	はい	18 100.0	6 33.3	8 44.4	3 16.7	1 5.6
	いいえ	668 100.0	183 27.4	296 44.3	178 26.6	11 1.6

⑦子どもへの言葉かけの内容別

「母親の気持ち的理解できる」は、叱る方が多いと回答した母親が51.5%を占め最も多い。最も少ない「叱らないように気をつけている」14.7%に比べると3.5倍であり、その他の多くの回答に比べても2倍近い。子どもの行動が母親のストレスや怒りを引き起こしているのか、あるいは、母親の精神状態によるものかは不明である。数は少ないが、「叱る方が多い」と回答した66名のうち「理解できる」が51.5%で他の言葉かけの内容の人に比べて2.6～3.3倍となっていることは注目すべきといえる。子どもを常時叱ることと児童虐待リスク因子の保持者の相関関係が指摘できるのではないか。前回調査では、「理解で

きる」について「叱る方が多い」50.5%、「叱らないように気をつけている」が51.1%と特に多かったが、他の項目についても2006年調査結果程大きな差異はみられない。(表22)

表22 児童虐待について（言葉がけの内容別）

(上段=実数 下段=%)

		全体(乳幼児の人数)	児童虐待に対する考え			
			母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他	不明
1 9 9 6 年	合計	878	324	359	188	7
		100.0	36.9	40.9	40.9	0.8
	しかるほうが 多い	93.0	47	26	20	0
		100.0	50.5	28.0	21.5	0.0
	ほめるほうが 多い	73.0	25	32	16	0
		100.0	34.2	43.8	21.9	0.0
	しかる・ほめ る半々	28.0	93	117	67	3
		100.0	33.2	41.8	23.9	1.1
2 0 0 6 年	しからないよ うに気をつけ ている	47.0	24	17	6	0
		100.0	51.1	36.2	12.8	0.0
	できるだけほ めるように心 掛けている	163	51	79	31	2
		100.0	31.3	48.5	19.0	1.2
	とくに気にか けていない	159	62	61	35	1
		100.0	39.0	38.4	22.0	0.6
	合計	903	263	393	231	16
		100.0	29.1	43.5	25.6	1.8
2 0 0 6 年	しかるほうが 多い	66	34	11	20	1
		100.0	51.5	16.7	30.3	1.5
	ほめるほうが 多い	140	35	69	34	2
		100.0	25.0	49.3	24.3	1.4
	しかる・ほめ る半々	300	87	128	80	5
		100.0	29.0	42.7	26.7	1.7
	しからないよ うに気をつけ ている	34	5	19	9	1
		100.0	14.7	55.9	26.5	2.9
2 0 0 6 年	できるだけほ めるように心 掛けている	165	43	74	45	3
		100.0	26.1	44.8	27.3	1.8
	とくに気にか けていない	162	49	76	35	2
		100.0	30.2	46.9	21.6	1.2
不明	36	10	16	8	2	
	100.0	27.8	44.4	22.2	5.6	

⑧子どもへの体罰の有無別

体罰を子どもに毎日のように与えている母親は「母親の気持ちか理解できる」が71.4%に達しており、時々与える30.6%、与えないことにしている22.7%に比べて突出している。体罰は与えないことにしている母親は、「理解できない」が54.2%と最も多いところから、子どもへの体罰の有無と児童虐待（リスク保持者）の相関関係がうかがえる。前回調査結

果においては「理解できる」が毎日のように与えている人が60.0%と少ないが、時々与える、与えないことにしているがやや多い。2006年調査では、毎日のように体罰を与えている母親の「理解できる」との回答が増加しており懸念される。(表23)

表23 児童虐待について(体罰の状況別)

(上段=実数 下段=%)

		全体	児童虐待に対する考え			
			母親の気持ちが理解できる	母親の気持ちが理解できない	その他	不明
1996年	合計	597 100.0	212 35.5	257 43.0	121 20.3	7 1.2
	毎日のように与えている	25 100.0	15 60.0	6 24.0	4 16.0	0 0.0
	時々与える	394 100.0	153 38.8	156 39.6	81 20.6	4 1.0
	体罰は与えないようにしている	172 100.0	44 25.6	91 52.9	35 20.3	2 1.2
	不明	-	-	-	-	-
2006年	合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
	毎日のように与えている	7 100.0	5 71.4	1 14.3	1 14.3	0 0.0
	時々与える	372 100.0	114 30.6	138 37.1	113 30.4	7 1.9
	体罰は与えないようにしている	308 100.0	70 22.7	167 54.2	65 21.1	6 1.9
	不明	15 100.0	4 26.7	4 26.7	5 33.3	2 13.3

⑨近所における母親の友人の有無別

近所における母親の友人の有無別にみると、「理解できる」は友人がいる人が27.9%、いない人は28.8%で大きな差異はない。「理解できない」は、友人がいる人は42.1%、いない人は59.3%である。近所の友人の有無と母親の育児ストレス感の相関関係はみられないが、友人の存在が、ストレスを招いているともいえるかも知れない。前回調査においては、「理解できる」は、友人がいる人は36.6%、友人がいない人は27.1%と大きな差異がみられた。「理解できない」は、2006年調査と同様の傾向がみられる。(表24)

⑩祖父母と会う頻度別

「母親の気持ちが理解できる」は、祖父母と同居もしくは毎日のように会う場合19%代であるが、会う回数が1年に1回やほとんど会わない場合は42%代に増加している。「理解できない」は祖父母と同居している場合は60.2%と最も多く、ほとんど会わない人を除いて、会う頻度が少なくなる程減少している。半年～1年に1回くらいの出合いが大きく変化しているのが目立っている。乳幼児を養育中の母親にとって祖父母との出会いはストレス感を軽減しているものと考えられる。(表25)

表24 児童虐待について（母親の友人の有無）

(上段=実数 下段=%)

	全体	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他	不明
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
いる	610 100.0	170 27.9	257 42.1	170 27.9	13 2.1
いない	59 100.0	17 28.8	35 59.3	7 11.9	0 0.0
不明	33 100.0	6 18.2	18 54.5	7 21.2	2 6.1

表25 児童虐待について（祖父母と会う頻度別）

(上段=実数 下段=%)

	全体	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他	不明
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
同居している	113 100.0	22 19.5	68 60.2	23 20.4	0 0.0
同居していないが毎日の ように会う	62 100.0	12 19.4	31 50.0	17 27.4	2 3.2
1週間に何回か会う	114 100.0	37 32.5	50 43.9	26 22.8	1 0.9
1ヶ月に2~3回くらい	138 100.0	39 28.3	59 42.8	38 27.5	2 1.4
1ヶ月に1回くらい	90 100.0	23 25.6	35 38.9	32 35.6	0 0.0
2~3ヶ月に1回くらい	85 100.0	25 29.4	35 41.2	23 27.1	2 2.4
半年に1回くらい	59 100.0	21 35.6	18 30.5	17 28.8	3 5.1
1年に1回くらい	19 100.0	8 42.1	6 31.6	4 21.1	1 5.3
ほとんど会わない	7 100.0	3 42.9	3 42.9	1 14.3	0 0.0
祖父母はいない	3 100.0	0 0.0	1 33.3	1 33.3	1 33.3
不明	12 100.0	3 25.0	4 33.3	2 16.7	3 25.0

(4) 母親の育児意識別児童虐待に対する意識

①期待する子ども像別

男女児合算で期待する子どもの像別に「母親の気持ちか理解できる」をみると、たくましい生活力が31.3%で最も多く、次いでやさしい精神28.8%、丈夫なからだ25.6%の順位

となっている。「気持ちが理解できない」は、丈夫なからだをあげている母親が50.9%で最も多く、たくましい生活力をあげている母親より約15ポイント多い。前回調査では、「理解できる」が全体に多い中で「たくましい生活力」をあげている母親が45.9%、次いでやさしい精神35.0%、丈夫なからだ31.5%となっており、両方の調査において同様の傾向がみられる。「理解できない」の回答では、丈夫なからだ46.6%とやさしい精神45.3%をあげている母親に大きな差異はない。「たくましい生活力」を子どもに期待する母親の意識は、両調査において、「児童虐待を理解できる」との回答が多くを占めている。即ち、他の子ども像をもつ母親より少なからず児童虐待リスク因子あるいは、育児ストレス感を抱えているといえるかもしれない。(表26)

表26 児童虐待について（子どもに期待する事がら別）

	全体	児童虐待に対する考え (上段=実数 下段=%)			
		母親の気持ちが理解できる	母親の気持ちが理解できない	その他	不明
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
丈夫なからだ	273 100.0	70 25.6	139 50.9	54 19.8	10 3.7
たくましい生活力	134 100.0	42 31.3	48 35.8	43 32.1	1 0.7
やさしい精神	299 100.0	86 28.8	140 46.8	71 23.7	2 0.7
その他	42 100.0	9 21.4	7 16.7	25 59.5	1 2.4
男子はいない	486	133	213	128	12
女子はいない	100.0	27.4	43.8	26.3	2.5
不明	5 100.0	2 40.0	1 20.0	1 20.0	1 20.0

② 幼少期の躰の考え方別

子どもへの躰に対する考え方は、「幼少期からしっかりしつけるべき」が73.6%で最も多く、前回調査の75.0%と大きな差異はみられない。児童虐待について「母親の気持ちが理解できる」の回答は「幼少期からしっかりしつけるべき」が28.8%で最も多く、「小学校に入った頃からしつける」22.2%、「厳しくしつける必要はない」21.7%である。「母親の気持ちが理解できない」は、小学校に入った頃から66.7%で最も多く、厳しくしつける必要はない52.2%であり、幼少期からしっかり44.9%に対して、21.8ポイント、14.5ポイントそれぞれ多い。前回調査でも「理解できる」は幼少期からしっかりが36.6%で最も多く、また「理解できない」についても小学校に入ってから60.0%で他の回答に比べ大きな差異がみられる。両調査において、幼少期からしっかり躰けるという考え方に比べ、躰については小学校に入った頃からで良いと大らかに考えている母親の方が、育児のプレッシャーやストレスが少ないといえるのかもしれない。(表27)

表27 児童虐待について（しつけに関する考え別）

	全体	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ちが理解できる	母親の気持ちが理解できない	その他	不明
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
幼少期からしっかりするべき	517 100.0	149 28.8	232 44.9	128 24.8	8 1.5
小学校入ったところからしつける	18 100.0	4 22.2	12 66.7	2 11.1	0 0.0
厳しくしつける必要はない	69 100.0	15 21.7	36 52.2	16 23.2	2 2.9
その他	57 100.0	15 26.3	15 26.3	25 43.9	2 3.5
わからない	32 100.0	9 28.1	13 40.6	8 25.0	2 6.3
不明	9 100.0	1 11.1	2 22.2	5 55.6	1 11.1

③子どもの将来で心配に思うこと別

子どもの将来で心配なことは、男の子、女の子で相違がみられ、一方、時代により変容がみられる。（注5） 2006年調査では、心配なこととして男の子は健康がトップにあげられ33.7%、次いで非行22.5%、職業17.8%であるのに対して、女の子は健康39.9%、非行16.4%、結婚8.8%となっている。「児童虐待について母親の気持ちが理解できる」については、男児では非行をあげた母親が41.2%で最も多く、次いで職業と結婚が33.3%である。女の子についてみると、結婚をあげている人が36.6%で最も多く、次いで非行34.2%となっている。「理解できない」は男女児共に進学（受験）をあげている人が最も多く、次いで健康、勉強の順位となっている。前回調査では、男女児合算で、「理解できる」が勉強52.6%、非行45.0%、職業38.6%であり「理解できない」は進学（受験）49.0%、職業45.5%、健康44.2%の順となっていた。両調査では「理解できる」に、非行が共通にあげられているが、他の勉強、職業、進学などの占める割合と順位は変化していることから子どもを取り巻く今日の社会環境がうかがえる。（表28-1、28-2）

④教師の体罰への考え別

教師の生徒への体罰については、「絶対にいけないと思う」と回答した母親は、22.8%、「時にはやむを得ない」66.2%、「大いに与えるべきだと思う」0.9%、「わからない」8.5%である。これらの回答を前回の調査と比べると、「大いに与えるべき」が0.7ポイント増加し、他はやや減少しているが、「わからない」が3.3ポイント増加している。「母親の気持ちが理解できる」は大いに与えるべきと回答した人が66.7%で群を抜いて多く、絶対にいけないと思うとの回答者23.1%の3倍近くとなっている。絶対にいけないと思うと回答した人は、「理解できない」が「理解できる」の2倍以上である。（表29）

表28-1 児童虐待について (子どもの将来で心配なこと別-女の子)
 (上段=実数 下段=%)

	全体	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他	不明
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
健康	185 100.0	038 20.5	97 52.4	47 25.4	3 1.6
勉強	18 100.0	6 33.3	8 44.4	3 16.7	1 5.6
非行	76 100.0	26 34.2	28 36.8	22 28.9	0 0.0
通学(受験)	32 100.0	8 25.0	18 56.3	6 18.8	0 0.0
職業	39 100.0	10 25.6	16 41.0	13 33.3	0 0.0
結婚	41 100.0	15 36.6	14 34.1	11 26.8	1 2.4
その他	44 100.0	10 22.7	17 38.6	17 38.6	0 0.0
女の子はいない	238 100.0	77 32.4	98 41.2	55 23.1	8 3.4
不明	29 100.0	3 10.3	14 48.3	10 34.5	2 6.9

表28-2 児童虐待について (子どもの将来で心配なこと別-男の子)
 (上段=実数 下段=%)

	全体	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他	不明
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
健康	153 100.0	42 27.5	79 51.6	30 19.6	2 1.3
勉強	19 100.0	6 31.6	9 47.4	4 21.1	0 0.0
非行	102 100.0	42 41.2	38 37.3	22 21.6	0 0.0
通学(受験)	28 100.0	6 21.4	16 57.1	6 21.4	0 0.0
職業	81 100.0	27 33.3	29 35.8	22 27.2	3 3.7
結婚	6 100.0	2 33.3	2 33.3	2 33.3	0 0.0
その他	35 100.0	9 25.7	11 31.4	15 42.9	0 0.0
女の子はいない	248 100.0	56 22.6	115 46.4	73 29.4	4 1.6
不明	30 100.0	3 10.0	11 36.7	10 33.3	6 20.0

表29 児童虐待について（教師の体罰への意見別）

表29 児童虐待について(教師の体罰への意見別)(上段=実数 下段=%)

	全体	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ちが理解できる	母親の気持ちが理解できない	その他	不明
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
絶対にいけないと思う	160 100.0	37 23.1	78 48.8	43 26.9	2 1.3
時にはやむをえないと思う	465 100.0	136 29.2	201 43.2	122 26.2	6 1.3
大いに与えるべきだと思う	6 100.0	4 66.7	2 33.3	0 0.0	0 0.0
わからない	60 100.0	15 25.0	28 46.7	16 26.7	1 1.7
不明	11 100.0	1 9.1	1 9.1	3 27.3	6 54.5

表30 児童虐待について（母親の子供時代のしつけ別）

(上段=実数 下段=%)

	全体	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ちが理解できる	母親の気持ちが理解できない	その他	不明
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
大変厳しかった	193 100.0	48 24.9	87 45.1	57 29.5	1 0.5
普通	477 100.0	134 28.1	216 45.3	120 25.2	7 1.5
大変甘かった	26 100.0	10 38.5	7 26.9	7 26.9	2 7.7
不明	6 100.0	1 16.7	0 0.0	0 0.0	6 83.3

⑤母親が子ども時代に親から受けた躰別

「母親の気持ちが理解できる」は、子ども時代に受けた躰が甘かったと回答した人が38.5%で最も多く、普通だったと回答した人より10.4ポイント、大変厳しかったとの回答者に比べ13.6ポイント多い。「母親の気持ちが理解できない」は躰が甘かったと答えた人が約20ポイント少ない。前回の調査と比べると、2006年調査は厳しかったが4.4ポイント増加しているが、普通と甘かったはそれぞれ少し減少している。1996年調査では「母親の気持ちが理解できる」は大変甘かったと回答した人の46.7%で、やはり他の回答より10ポイント余り多い。母親が子ども時代に受けた躰が、双方の調査結果において児童虐待についての考え方に同様の傾向がみられる。子どもの行動は、時に母親を悩ませ、イライラさせることがあるが、それに対して母親の幼少期の躰や生育歴において形成された忍耐力や

寛容さ、性格等により対応に相違が生ずるのだろうか。もしくは、母親自身が受けたような甘い躰で我が子を育てていることで、子どもの行動が手に負えないものになっているのだろうか。子ども時代に受けた躰のあり方により児童虐待リスク因子の発生の有無や育児ストレス感に差異がみられることは注目に値するといえよう。(表30)

⑥子育てが楽しいかつらいか別

「児童虐待をする母親の気持ちが理解できる」は、子育てがつらいと回答した人の62.5%に達しており、大変楽しい17.7%、楽しくもありつらくもある31.8%の回答者に比べて突出している。「母親の気持ちが理解できない」は大変楽しい、と答えた母親の58.3%を占めている。前回調査では、子育てがつらい、と考えている母親の100.0%が「理解できる」と回答している。大変楽しい、楽しくもありつらくもある人の回答はそれぞれ2006年調査結果より多いが、同様の傾向がみられる。「母親の気持ちが理解できない」は、2006年調査では、子育てが大変楽しい、と考えている人が10ポイント増えていることが目立つ。(表31)

⑦子どもを持って感じること別

- a) 子どもを持って自分も成長していると感じない人は「理解できる」が54.8%で、いつも感じる人19.9%の2.8倍である。また時々感じる人30.7%に比べて24.1ポイント多い。
- b) 子どもがいるのでやりたいことができない、といつも感じている人は「理解できる」

表31 児童虐待について（子育てへの感想別）

		全体	児童虐待に対する考え (上段=実数 下段=%)			
			母親の気持ちが理解できる	母親の気持ちが理解できない	その他	不明
			1996年	合計	597 100.0	212 35.5
1996年	大変楽しい	107 100.0	31 29.0	52 48.6	24 22.4	0 0.0
	楽しくもありつらくもある	462 100.0	172 37.2	193 41.8	92 19.9	5 1.1
	つらい	3 100.0	3 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0
	合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
	大変楽しい	192 100.0	34 17.7	112 58.3	46 24.0	0 0.0
2006年	楽しくもあり、つらくもある	478 100.0	152 31.8	192 40.2	126 26.4	8 1.7
	つらい	8 100.0	5 62.5	0 0.0	2 25.0	1 12.5
	なんともいえない	17 100.0	2 11.8	5 29.4	9 52.9	1 5.9
	不明	7 100.0	0 0.0	1 14.3	1 14.3	5 71.4
	合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1

が42.0%で、そう感じていない母親18.7%に比べて約2.2倍となっている。また、感じていない人は、「理解できない」が59.7%を占め、いつも感じている母親の約2倍となっており、大きな差異が見られる。

- c) 子どものことでイライラすることをいつも感じている母親は「理解できる」が55.6%を占め、感じない人に比べて約4.3倍に達している。イライラを感じない母親は「理解できない」との回答が71.0%を占めている。
- d) どのように育てたらよいかとの不安をいつも感じる人は、「理解できる」が41.5%を占め、時々感じる28.4%、感じない21.7%に比べ大きな差異がみられる。「理解できない」は、不安を感じない母親は52.2%で感じる、と時々感じるに比べ10ポイント余り多い。

前回調査と比較すると、自分自身も成長しているといつも感じている母親が「理解できる」が、10.3ポイント減少し、一方、感じない人は、10.4ポイント増加している。他の項目ではすべて「理解できる」の回答が減少の傾向がみられる中で注目される。また、子どものことでイライラすると感じない母親は、この調査において「理解できない」が70%以上を占めている。これらの調査結果から、自分の人生におけるわが子の養育を受容もしくは積極的に評価しているか、あるいは否定感や拒否感、不安感を抱いているかの両者の間に、「児童虐待における母親の気持ち」の理解の可否に相関関係がみられる。即ち、児童虐待リスク要素の保持者と理解できるであろう。(表32)

(5) 育児支援施策の利用状況と希望施策別児童虐待に対する意識

①現在利用している育児支援施策別

育児支援策の利用は、1996年調査に比べて、大半が増加している。特に一時保育は、1.8%から21.2%と11.8倍、園庭等の開放は2.8倍となっている。利用したことはないとの回答は、22.5%と約半減している。これらの利用状況別に児童虐待の理解についてみると、育児相談の利用の有無については「理解できる」と「理解できない」にほとんど差異はみられない。育児講座と児童館の保育クラスの利用者は、「理解できる」が3~4ポイント少ない。一方、一時保育や園庭開放の利用者は「理解できる」が3~8ポイント多い。育児支援施策を利用したことがない人は、利用したことがある人に比べ「理解できる」が3.5ポイント多い。二つの調査結果を比較すると、一部を除いて多くの施策の利用者は、「理解できる」が減少し、「理解できない」と回答した人が増加している。その中で育児講座、園庭開放の利用者が、「理解できない」が約10ポイント増加している。「理解できない」が前回より減少している人は、育児相談と育児講座を利用していない人、および、育児支援施策を利用していない人たちである。何らかの育児支援施策を地域の中で積極的に探し、利用している人は、育児のストレスが減少していると考えられるが、積極的に利用する母親の中には、育児の悩みやストレスが強い状況にあるとも考えられる。また、育児支援施策の利用がそれらの軽減に役立っているといえるかもしれない。(表33)

表32 児童虐待について（子どもを持って感じること別）

(上段=実数 下段=%)

		全体	児童虐待に対する考え		
			母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	
子どもを持って自分自身も成長している	いつも感じる	266 100.0	53 19.9	141 53.0	70 26.3
	時々感じる	398 100.0	122 30.7	159 39.9	109 27.4
	感じない	31 100.0	17 54.8	9 29.0	5 16.1
	不明	7 100.0	1 14.3	1 14.3	0 0.0
子どもがいるのでやりたいことができない	いつも感じる	81 100.0	34 42.0	25 30.9	18 22.2
	時々感じる	481 100.0	134 27.9	204 42.4	137 28.5
	感じない	134 100.0	25 18.7	80 59.7	29 21.6
	不明	6 100.0	0 0.0	1 16.7	0 0.0
子どものことでイライラする	いつも感じる	81 100.0	45 55.6	18 22.2	15 18.5
	時々感じる	548 100.0	140 25.5	243 44.3	159 29.0
	感じない	62 100.0	8 12.9	44 71.0	9 14.5
	不明	11 100.0	0 0.0	5 45.5	1 9.1
どのように育てたらよいか不安を感じる	いつも感じる	65 100.0	27 41.5	26 40.0	12 18.5
	時々感じる	444 100.0	126 28.4	185 41.7	127 28.6
	感じない	184 100.0	40 21.7	96 52.2	44 23.9
	不明	9 100.0	0 0.0	3 33.3	1 11.1

②育児サークルへの参加状況別

各地に普及している育児サークルへの参加状況別に「虐待する母親の気持ち理解できる」をみると、参加していない人が25.8%で最も少なく、参加している人は、32.3%で6.5ポイント多い。かつて参加したことのある人は、30.3%である。「理解できない」は前者2つに大きな差異がないが、かつての参加者は、27.3%と少なく、また「その他」が40.9%と突出していることが目立つ。積極的に育児サークルを探し参加している、及びかつて参加していた母親の方が参加していない母親に比べて、育児等の悩みや負担感があるとすれば、これらの回答結果は理解できるといえる。

前回調査と比較すると、育児サークルへの参加者は、2006年は、2倍以上に増えている。児童虐待について「理解できる」については、いずれの回答も減少しているが、特に参加し

表33 児童虐待について（育児支援施策の利用状況別）

		(上段=実数 下段=%)				
		全体	児童虐待に対する考え			
			母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他	不明
合計		702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
育児相談	はい	238 100.0	65 27.3	100 42.0	68 28.6	5 2.1
	いいえ	445 100.0	122 27.4	200 44.9	114 25.6	9 2.0
	不明	19 100.0	6 31.6	10 52.6	2 10.5	1 5.3
育児講座	はい	200 100.0	49 24.5	78 39.0	66 33.0	7 3.5
	いいえ	483 100.0	138 28.6	222 46.0	116 24.0	7 1.4
	不明	19 100.0	6 31.6	10 52.6	2 10.5	1 5.3
保育所の緊急一時保育	はい	135 100.0	41 30.4	46 34.1	42 31.1	6 4.4
	いいえ	548 100.0	146 26.6	254 46.4	140 25.5	8 1.5
	不明	19 100.0	6 31.6	10 52.6	2 10.5	1 5.3
保育所・幼稚園の園庭解放	はい	236 100.0	77 32.6	90 38.1	65 27.5	4 1.7
	いいえ	447 100.0	110 24.6	210 47.0	117 26.2	10 2.2
	不明	19 100.0	6 31.6	10 52.6	2 10.5	1 5.3
児童館の保育クラス	はい	62 100.0	15 24.2	24 38.7	22 35.5	1 1.6
	いいえ	621 100.0	172 27.7	276 44.4	160 25.8	13 2.1
	不明	19 100.0	6 31.6	10 52.6	2 10.5	1 5.3
利用したことはない	はい	158 100.0	39 24.7	79 50.0	39 24.7	1 0.6
	いいえ	525 100.0	148 28.2	221 42.1	143 27.2	13 2.5
	不明	19 100.0	6 31.6	10 52.6	2 10.5	1 5.3

ている人、かつての参加者が12～16ポイントと大きく減少している。また「理解できない」については、育児サークルに参加している母親が、約2倍近くに増えているのが目立つ。10年前の育児サークルが、公園の集まりや母親のグループにより成立していたことに比べ、今日は、保健所（センター）や子育て支援センターの支援で地域の中にサークルが多く設置されている。育児相談等内容的にも充実し、サークル活動への支援もみられ地域の母親にとっては、利用しやすい身近な育児サークルに発展しているといえる。（表34）

④保育施設に希望する保育別

知的早期教育の重視を回答した母親が「理解できる」が36.4%で最も多く、また「理解できない」も63.6%で最も多い。早期教育と遊び両方の保育を希望する人は、「理解できる」

表34 児童虐待について（育児サークルへの参加状況別）

（上段=実数 下段=%）

	全体	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他	不明
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
参加している	155 100.0	50 32.3	69 44.5	34 21.9	2 1.3
参加していない	476 100.0	123 25.8	220 46.2	122 25.6	11 2.3
参加していたが 現在は参加して いない	66 100.0	20 30.3	18 27.3	27 40.9	1 1.5
不明	5 100.0	0 0.0	3 60.0	1 20.0	1 20.0

表35 児童虐待について（園に希望する保育別）

（上段=実数 下段=%）

	全体	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他	不明
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
知的早期教育 の重視	11 100.0	4 36.4	7 63.6	0 0.0	0 0.0
遊び中心の保 育	236 100.0	67 28.4	98 41.5	69 29.2	2 0.8
早期教育と遊び 両方	114 100.0	28 24.6	61 53.5	23 20.2	2 1.8
基本的生活習 慣の指導	268 100.0	72 26.9	122 45.5	70 26.1	4 1.5
その他	20 100.0	9 45.0	2 10.0	8 40.0	1 5.0
不明	53 100.0	13 24.5	20 37.7	14 26.4	6 11.3

が24.6%で最も少なく、「理解できない」が53.5%と2番目に多い。各回答に大きな有意の差はないといえよう。前回の調査では、「理解できる」は、4つの回答共に33.3%~39.4%で大きな差異はみられなかった。知的早期教育の重視が最も少なかった。（表35）

⑤充実して欲しい育児支援施策別

充実して欲しい子育て支援は、2回の調査結果共に、自由に遊べる場所、経済的支援、職場環境の改善の順位は同様である。2006年調査において「母親の気持ち理解できる」の回答では経済的支援をあげている人が31%で最も多く、あげていない人の22.4%より8.6ポイント多く、その他自由に遊べる場所、安心して預けられる施設の回答に数ポイントの差異がみられる。回答者は少ないが、充実して欲しい施策が特にならない人は「理解できる」は0.0%、「理解できない」が77.8%である。「理解できない」で差異がみられるのは、職場環境が11.8

ポイント、経済的支援9.5ポイント、安心して預けられる施設7.1ポイントがいずれも希望していない人が多い。育児支援施策の充実度が、児童を養育中の母親の負担感に有意の差をもたらしていると考えられる。(表36)

表36 児童虐待について（充実して欲しい育児支援施策別）

(上段=実数 下段=%)

		全体	児童虐待に対する考え			
			母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他	不明
合計		702	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
子どもが友だちと 自由に遊べる場所	はい	501 100.0	146 29.1	221 44.1	123 24.6	11 2.2
	いいえ	195 100.0	46 23.6	86 44.1	60 30.8	3 1.5
	不明	6 100.0	1 16.7	3 50.0	1 16.7	1 16.7
子育てについての 相談や学習ができる 場所	はい	127 100.0	32 25.2	58 45.7	34 26.8	3 2.4
	いいえ	596 100.0	160 28.1	249 43.8	149 26.2	11 1.9
	不明	6 100.0	1 16.7	3 50.0	1 16.7	1 16.7
子どもを安心して あずけられる施設	はい	302 100.0	91 30.1	121 40.1	85 28.1	5 1.7
	いいえ	394 100.0	101 25.6	186 47.2	98 24.9	9 2.3
	不明	6 100.0	1 16.7	3 50.0	1 16.7	1 16.7
父母どちらでもと れる育児休暇制 度	はい	227 100.0	61 26.9	92 40.5	70 30.8	4 1.8
	いいえ	469 100.0	131 27.9	215 45.8	113 24.1	10 2.1
	不明	6 100.0	1 16.7	3 50.0	1 16.7	1 16.7
親が子育てに十分 かかわれるような 職場環境	はい	384 100.0	109 28.4	149 38.8	120 31.3	6 1.6
	いいえ	312 100.0	83 26.6	158 50.6	63 20.2	8 2.6
	不明	6 100.0	1 16.7	3 50.0	1 16.7	1 16.7
子育てや子どもの 教育のための経 済的支援	はい	419 100.0	130 31.0	169 40.3	112 26.7	8 1.9
	いいえ	277 100.0	62 22.4	138 49.8	71 25.6	6 2.2
	不明	6 100.0	1 16.7	3 50.0	1 16.7	1 16.7
とくにない	はい	9 100.0	0 0.0	7 77.8	2 22.2	0 0.0
	いいえ	687 100.0	192 27.9	300 43.7	181 26.3	14 2.0
	不明	6 100.0	1 16.7	3 50.0	1 16.7	1 16.7

(6) 母親の就労に対する考え方別児童虐待に対する意識

①母親が職業を持つことへの考え方別

子どもを持つ母親が働くことについては、「家庭と両立させて主婦も生涯働いても良いと思う」が51.9%と最も多い。10年前の調査に比べると、「子どもが乳幼児の頃は働くべきではない」が減少し、「家庭と両立して就労するのも良い」が増加している。児童虐待に対する考え方とのクロス集計の結果は、「理解できる」は、子どもが乳児の頃働くべきではない、と回答した人が30.0%で最も多く、次いで両立させて就労しても良い、と子どもが働くことも経済的理由ならやむを得ないがそれぞれ約28%である。子どもが小学校卒業までは働くべきではないと回答している人は、13.3%と非常に少ないのが目立つ。1996年の調査結果では、回答者は少なかったが、「中学校を卒業するまで働くべきではない」と回答した人で「理解できる」は77.8%と最も多かった。「小学校を卒業するまで働くべきではない」「主婦は働くべきではない」と回答した人は「理解できない」が多かった。その他の回答間に大きな差異はみられない。2006年調査では、両立させて働いても良い、経済的理由なら働いても良いの回答が児童虐待に対する考え方において、母親の就労に対する考え方との相関関係がうかがえる。(表37)

表37 児童虐待について（子どもを持つ主婦の就労への考え方別）

(上段=実数 下段=%)

	全体	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他	不明
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
子供が乳児の頃は働くべきでない	60 100.0	18 30.0	30 50.0	11 18.3	1 1.7
子どもが小学校入学前は働くべきでない	32 100.0	6 18.8	20 62.5	5 15.6	1 3.1
子どもが小学校卒業までは働くべきでない	15 100.0	2 13.3	9 60.0	3 20.0	1 6.7
子どもが中学校卒業までは働くべきでない	1 100.0	0 0.0	1 100.0	0 0.0	0 0.0
子どもが高校卒業まで働くべきでない	3 100.0	0 0.0	2 66.7	1 33.3	0 0.0
主婦は働くべきではない	1 100.0	0 0.0	1 100.0	0 0.0	0 0.0
家庭と両立させ主婦も生涯働いてもよい	365 100.0	103 28.2	152 41.6	103 28.2	7 1.9
子どもが幼くても経済的理由で働くならやむをえない	172 100.0	47 27.3	80 46.5	41 23.8	4 2.3
その他	41 100.0	12 29.3	11 26.8	17 41.5	1 2.4
不明	12 100.0	5 41.7	4 33.3	3 25.0	0 0.0

②有職の母親の就労継続の意志別

有職の母親の就労継続の意志は、68.8%が働き続けたい、そのうちやめたいが6.9%である。10年前の調査に比べて前者が3.2ポイント増加し、後者が4.2ポイント減少している。児童虐待について母親の気持ちが「理解できる」は、働き続けたい人が28.4%で最も多く、そのうちやめたい人より10.2ポイント多い。「理解できない」は、そのうちにやめたい人が50.0%で、働き続けたい人より4.1ポイント多い。就労の継続についてわからないと考えている人は、「その他」が最も多く、「理解できない」は最も少ない。前回調査では、「理解できる」はそのうちにやめたい人が43.8%で最も多かったが、2006年調査では大きく減少し、順位が逆転している。10年間の間に、保育施策の向上が見られたと受けとるべきであろうか。(表38)

表38 児童虐待について（母親が有職の場合の今後の就労意向別）

(上段=実数 下段=%)

	全体	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ちが理解できる	母親の気持ちが理解できない	その他	不明
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
働き続けたい	218 100.0	62 28.4	100 45.9	52 23.9	4 1.8
そのうちにやめたい	22 100.0	4 18.2	11 50.0	7 31.8	0 0.0
わからない	58 100.0	16 27.6	23 39.7	19 32.8	0 0.0
不明	19 100.0	4 21.1	10 52.6	5 26.3	0 0.0

③母親の無職の場合の今後の就労以降別

無職の母親の80.6%が将来働きたいと答えており、10年前に比べると10ポイント増加している。「理解できる」についてみると将来働きたい人が29.5%で、将来も働きたくない人に比べ12ポイント多い。「理解できない」は将来も働きたくない人は57.1%と働きたくない人の40.9%と大きな差異が見られる。前回調査と比較すると、将来も働きたくない人が「理解できる」との回答が27.0%であったので9.5ポイント上昇した他は両調査結果に大きな差異はみられない。本調査において、就労の動機として、家計の補助等の経済的理由をあげた母親は合計69%に達し、10年前に比して増加している。働き続けたい人と、将来は働きたい人は、いずれも児童虐待について「理解できる」が29%前後を占め、一方、そのうちに就労をやめたい人と将来も働きたくない人が、同様に18%前後となっている。就労の動機が経済的理由が大きいとするならば、両者の差異は就労の動機に起因しているとも考えられる。(表39)

表39 児童虐待について（母親が無職の場合の今後の就労意向別）

（上段＝実数 下段＝％）

	全体	児童虐待に対する考え			
		母親の気持ち が理解できる	母親の気持ち が理解できない	その他	不明
合計	702 100.0	193 27.5	310 44.2	184 26.2	15 2.1
働きたい	308 100.0	91 29.5	126 40.9	82 26.6	9 2.9
働きたくない	63 100.0	11 17.5	36 57.1	14 22.2	2 3.2
不明	11 100.0	4 36.4	3 27.3	4 36.4	0 0.0

6. 結論

児童虐待の発生要因に関して、1970年代以降、専門の立場からの理論がみられるようになった。ベルスキーは、1978年、①精神医学的モデル-虐待の加害者がもつ諸要因を虐待発生の主因として重視するもの ②社会学的モデル-虐待の発生要因を社会的ストレス、低所得、地域での孤立、多子家庭、夫婦の不和などに求める ③子どもが養育者に及ぼす影響モデル-虐待発生要因として子ども自身の要因、親や家庭の問題ではなく、親とその子どもとの関係を問題とする。ベルスキーは、これらの親、社会、子どものダイナミックな相互作用が虐待発生に関与していることを指摘している。（注6） ブロンフェブレナーは1977年子どもと環境との相互作用を重視し発達生態学理論にもとづく包括的なモデルを示した。ベルスキーはこの理論の枠組みを用いて虐待の発生要因を整理した。庄司は、虐待の発生に結びつく可能性のある虐待のリスク要因（危険因子）は、虐待発生の可能性を高める要因であるが、「リスク因子」イコール「虐待の発生」とはいえないことに注意するべきであること。そして、リスク因子のみでなく虐待の発生を防止するにはたらく要因として、補償因子も考慮に入れるべきであることを述べている。例え児童虐待発生の諸条件である虐待リスク因子が存在したとしても、それを克服できる知的能力等すぐれたものをもっていたり、良い伴侶や友人に恵まれたり、経済的に安定した家庭生活や、その社会が暴力に反対する文化である事や、子どもを社会全体で育てようという感覚を共有する文化においては、虐待の発生を防止するように働くという。逆に、子どもを親の所有物とみなす文化や、体罰を容認する文化、経済的不況などは児童虐待のリスクを高めるといふ。（注7） 補償因子の説は、日本の社会で増加している児童虐待発生の要因の理解と一方、防止のための取り組みについて重要な示唆を与えていると考える。

深谷らは、育児不安に関する国際比較調査において、質問紙調査の中で「子どもがかわいくない」と答えた事例を分析し育児不安の中にひそむ虐待のリスク要素を調べた結果、日本の母親のきわだった育児不安の実態がみられることを明らかにしている。虐待者の60%以上が「子どもがかわいくない。虐待しそう」との回答がみられるという。（注8）

本稿においては、「児童虐待をする母親の気持ちが理解できる」と「理解できない」のグループに分け、子どもを養育中の母親の意識について、多岐にわたる要素をクロス集計し分析を試みた。10年間にわたる2回の調査結果に類似の傾向がみられたものも多かったが、逆転している結果もみられ、分析・考察の困難なものもあった。1996年調査と比較すると、2006年調査では、「児童虐待をする母親の気持ちが理解できる」が35.5%から8ポイント減少し、27.5%になっていることは特記すべきことと考える。「虐待する母親の気持ちが理解できる」と回答した母親を「育児にストレスを有する人」あるいは「児童虐待のリスク因子をもつ人」として、状況によっては「児童虐待予備軍」と呼べる母親たちとの仮説においては、この回答の結果は望ましい傾向といえよう。先の2回の調査時期に比べると、今日地域社会における子育て支援への多様な取り組みは目をみはるばかりである。親が求めるなら、様々な場所に育児相談が用意されており、母親を孤立化させない取り組みも多く見られるようになった。しかし、児童虐待は、事件として報じられない日はない程あとを絶たない。

多くの親は、わが子を大切に育み、子どもの将来のために心を砕き、努力している。しかし、児童虐待は時には最悪の事態として発生している。虐待発生の諸条件が重なりリスク因子を克服する補償因子が、親自身と取り巻く環境の中に十分に存在していなかったと理解される。母親の児童虐待に対する意識調査結果から、児童虐待について母親の気持ちが「理解できる」と「理解できない」において明らかな有意差がみられたものとして、居住地域、1人親家庭（母子）、住宅事情、経済的事情、祖父母と会う頻度、母親が子ども時代に受けた躰のあり方、育児書からの情報、父親の育児参加の有無などがあげられる。一方、中でも子どもへの言葉かけの内容、体罰、子育て中の意識についての差異は顕著であり、強い育児ストレス感、あるいは明らかに児童虐待発生のリスク因子として考えられる。

以上のことから、多くの家庭は、児童虐待発生のリスク因子といえるものを抱えながら子どもを養育していることがうかがえる。児童虐待発生の防止のためには、社会保障を含めた多様な子ども家庭福祉施策を始めとして、児童養育にふさわしい社会の健全な文化と、子育てしやすい温かな社会環境が補償因子として求められており、それは喫緊の課題であるといえる。

注

1. 深谷冒志編「育児不安の国際比較」学文社 2008年 115頁
2. 高橋重宏編「子供虐待・新版」有斐閣 2008年 96～97頁
3. 伊藤わらび「児童虐待に対する母親の意識と育児支援施策のあり方」大妻女子大学一家政系一第35号 1999年
4. 伊藤わらび「乳幼児の育児の実態と母親の育児意識 その1. 20年間の変貌にみる育児の諸問題と育児支援のあり方」十文字学園女子大学人間生活学部紀要 第5巻 109-140頁 2007年
5. 國米欣明「その子育ては科学的に間違っています。」三一書房 2007年 34頁
 國米は、医師の立場から、乳児期の育児の困難な原因の一つとして、これまで推奨されてきた「欲しがるときに欲しがらだけ」という子どもの意志にまかせた「自律授乳法」にあると指摘している。乳児の脳の発達のためにも親が授乳間隔を決めるよう提言している。
6. 前掲書（注2）94～95頁

7. 前掲書（注2）103-104頁
8. 前掲書（注1）115頁

参考文献

1. 伊藤わらび「戦後日本における母子心中の一考察」武蔵野短期大学研究紀要 第2号 1985年
2. 伊藤わらび「児童虐待に対する母親の意識と育児支援施策のあり方」大妻女子大学紀要—家政系— No.35 1999年
3. 伊藤わらび「乳幼児の育児の実態と母親の育児意識 その1. 20年間の変貌にみる育児の諸問題と育児支援のあり方」十文字学園女子大学人間生活学部紀要 第5巻 2007年
4. 池田由子「児童虐待」中公新書 1987年
5. 斉藤 学「子どもの愛し方がわからない親たち」講談社 1992年
6. 津崎哲郎「子どもの虐待」朱鷺書房 1992年
7. 大日向雅美「子育てがいやになるときつらいとき」主婦の友社 1993年
8. 西澤 哲「子どもの家族への治療的アプローチ」誠信書房 1994年
9. 斉藤 学編「児童虐待（危機介入編）」金剛出版 1994年
10. 東京都編「子どもの虐待防止マニュアル」東京都 1995年
11. 奥山、浅井編「保育者・教育者のための子ども虐待防止マニュアル」ひとなる書房 1997年
12. 武田京子「わが子をいじめてしまう母親たち」ミネルヴァ書房 1998年
13. 子どもの虐待防止センター編「子どもの虐待防止センター報告書」子どもの虐待防止センター発行
14. 井垣章二「児童虐待の家族と社会—児童問題にみる20世紀」ミネルヴァ書房 1998年
15. 吉田恒雄他著「児童虐待への介入—その制度と法」向学社 1998年
16. 庄司順一「子ども虐待の理解と対応—子どもを虐待から守るために」フレーベル館 2001年
17. 浅井春夫「子どもの虐待の福祉学」小学館 2002年
18. メアリー・E・ヘルファ他編 坂井聖二監訳「虐待された子ども ザバタード・チャイルド」明石書店 2003年
19. P,レイダー、S・ダンカン著、小林、西澤監訳「子どもが虐待で死ぬとき—虐待死亡事例の分析」明石書店 2005年
20. 上野加代子編著「児童虐待のポリティクス—『こころ』の問題から『社会』の問題へ」明石書店 2006年
21. 田邊泰美「イギリスの児童虐待防止とソーシャルワーク」明石書店 2006年
22. クリス・トロッター著 清水隆則監訳「援助を求めないクライアントへの対応—虐待・DV・非行に走る人の心を開く」明石書店 2007年
23. 小林美智子、松本伊智朗編著「子ども虐待—介入と支援のはざままで」明石書店 2007年
24. 國米欣明「その子育ては科学的に間違っています。」三一書房 2007年
25. 深谷冒志編「育児不安の国際比較」学文社 2008年
26. 牧陽子「産める国フランスの子育て事情—出生率はなぜ高いか」明石書店 2008年
27. 高橋重宏編「子ども虐待—子どもへの最大の人権侵害」新版 有斐閣 2008年

Summary

The child abuse is increasing year by year in Japan. The Child Guidance Centers accepted the cases of the child abuse over 40000 in 2007. This number is 36.9 times compared with 1990. The infants in the children who received cruel treatments account for 42.3%. I attempted to study the appropriate surroundings of child care to prevent from abusing children, and I tried to find the risk factors of child abuse. I carried out 3rd research study in 2006, using 702 mothers' answers. 27.5% in mothers answered they understood the mothers' feeling who treated their children badly. In 1996 survey, it was 35.5%. It's seemed that there are some kinds of the child care support measures in community nowadays. The result of 2006 study shows as the risk factor the stress of mothers on bringing up their children, which are given by the economy, the condition of house, one parent family, the information for the child care, help of husband, the discipline in mother's child hood, seeing the grand parents, etc. Many family have such problems as the risk factor. The various, and appropriate child care support measures in community to prevent the child abuse need as compensation factor.